

シンポジウム

音楽の国ドイツ?—音楽と社会—

2011年6月25日(土) 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター

司会 玉川裕子・渋谷哲也

はじめに	玉川裕子
「音楽の国ドイツ」の成立と崩壊	松本 彰
混合趣味の盛衰と民謡の発見	
—18世紀ドイツ音楽とナショナル・アイデンティティ	吉田 寛
変容する市民文化のなかの「ドイツ音楽」	
—「オペラの危機」とジャズを通して	長木誠司
ドイツ大衆音楽の空間表象	
—民謡からパンクまで	高橋秀寿
コメント フランスから見た「音楽の国ドイツ」	井上さつき

はじめに

玉川裕子

「ドイツはクラシック音楽の本場」というのは、現代日本の多くの人びとに共有されているイメージだろう。西洋音楽の歴史を多少なりとも振り返ってみれば、イタリアやフランス、そしてまたイギリスやスラブ地域もヨーロッパにおける音楽文化の重要な一翼を担ってきた。にもかかわらず、今日私たちがオーストリアも含めたドイツ語圏こそがヨーロッパ音楽の中心地だと思ってしまうのは、ドイツ音楽が他の地域の音楽のいずれにも比して美的に優れ、普遍性を獲得しているからでは、もちろんない。「音楽の国ドイツ」というのは、ナチスのスローガンのひとつであった。このことが象徴的に示すように、ドイツを音楽の国とする自己および他者イメージは、音楽のみならず、社会・政治・経済等のさまざまな要因が関与して創りあげられ、拡散・変容していったものであった。

本シンポジウムの出発点にあるのは、ドイツ近代市民社会および国民国家の生成発展に、音楽実践や音楽をめぐる言説が、さまざまなかたちで関与していたという認識である。市民層への帰属のメルクマールとして、「財産」とならんで—ある意味ではそれ以上に—「教養」が重要視されたドイツ市民層に

とって音楽の素養も必須とされたことは、ドイツ近代市民社会についての社会的な研究以来ほとんど定説となっている。この点については、ドイツ学会でも2007年に宮本直美氏がフォーラムで取りあげている。その際宮本氏は、ビーレフェルト学派を中心とする社会史研究の成果に依拠しつつ、さらに一步踏み込んだ議論を展開した。音楽、とりわけ器楽曲は音という素材の特性ゆえに現実世界の具体的なものと直接的な関係をもたず、把握されがたい。そのため絶えず目指すべき価値あるものとして理想化されていくことになった。音楽のこの非規定性にこそ教養概念との同型性が見出され、ひいては音楽が教養市民層にとって特別な価値を獲得することになったのだと、宮本氏は主張する⁽¹⁾。

一方1980年代以降、歴史学におけるナショナリズム研究に刺激を受けながら、音楽のナショナルなものの創出への関与もテーマ化されるようになっていった。宮本氏ももちろんナショナリズム論を取り込んでいる。しかし、音楽学におけるナショナリズム論がより集中的に取り組んだのは、これまで自明とされてきた歴史記述の枠組それ自体を問うことであった。現在広く流布している西洋音楽史の記述は、とりわけ18世紀後半以降、ドイツ語圏出身の(男性)作曲家および彼らの作品に集中し、あたかもドイツ音楽がヨーロッパの音楽文化の中心を形成してきたかのごとき様相を呈している。しかし、18世紀半ば過ぎまでドイツはむしろ音楽の後進国とみなされていた。ドイツの音楽が西洋音楽の正統イメージを獲得し、それがドイツという境界を越えて広く世界に周知していく過程は、統一ドイツへの希求およびその実現と軌を一にするものであった⁽²⁾。

本シンポジウムでは、ドイツ史およびドイツ音楽を中心的な研究テーマとする4人のパネリストが、市民社会成立期(18世紀後半から19世紀前半)、爛熟期(1920年代)および解体期(第二次世界大戦後)において、音楽と「市民」および「ドイツ」イメージがどのように結びついていったか(あるいは結びつけられていったか)について、音楽実践のあり方、音楽についての言説、あるいは歌詞等を手がかりに、各自の視点から報告を行った。フランス音楽史の専門家によるフランスの音楽状況についてのコメントは、「音楽の国ドイツ」イメージの射程を浮かび上がらせ、普仏戦争後の政治と文化の錯綜した関係をあらた

(1) 以下を参照。宮本直美「19世紀ドイツの教養と音楽」『ドイツ研究』第42号(2008年)、47-63頁。なお、同氏の学位請求論文『教養の歴史社会学—ドイツ市民社会と音楽』(岩波書店、2006年)は、2006年度のドイツ学会奨励賞を受賞している。

(2) この問題をもっとも包括的に扱っている日本語の研究は、本シンポジウムの参加者でもある吉田寛氏の博士論文である。『近代ドイツのナショナル・アイデンティティと音楽—《音楽の国ドイツ》の表象をめぐる思想史的考察』(東京大学大学院人文社会研究科博士學位申請論文、2005年3月)。研究史についても、同書に詳しい。

めて考えるきっかけとなるものであった。今後、階層、民族、ナショナリズム等の社会的・政治的諸問題に文化戦略がどのように関わっているのか、さらに議論が重ねられることを切望するとともに、音楽という切り口から逆にこれらの諸問題をめぐる議論に新しい視座が開かれることを期待したい。